



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

謹賀新年

「スピリチュアル・ツーリズム」

異国には、行き難いものがある。わが愚息・韋駄天はどうゆう理由か、海外渡航を好まない。愚妻は、遊園地の遊覧飛行でも、乗ると喜んでいる。わが愚娘シーター姫は、わが輩の血を不運にも受け継いだのか、猪突猛進のきらいがある。中学生のとき勇猛果敢にも一人でニュージーランドに行った。姫に大いに期待した時期もあったが、今では仲良く口もきかない。

わが輩は仕事柄海外に行くことは多いが、実はアジア以外に行くことは稀である。インド以外の国に行きたいとは思わない。

ところが運命の歯車が少しずれたのか、オーストラリアに行くことになってしまった。「異国には、行き難いものがある」と宣ったとおり、わが輩の腰がなかなか上がらない。何日にしようかと迷っていたが、年末が近づいてきて重い腰を上げた。

インド大魔王が何故にオーストラリアへ、と訝る読者諸氏も多いことだろう。

実はネタ探しである。新年早々「スピリチュアル・ツーリズム」というお題で話をする事になった。「それじゃ、お得意のインドでいいじゃないの？」と読者諸氏はさらに訝るであろう。裏話をするとお話をする舞台が「オーストラリア」に関係する施設なのである。なんとか無理やりにでも「オーストラリア」に関連付ける必要が生じてきた。

ところが、わが輩はオーストラリアに行ったことがない。常に体験を重んじるわが輩としては、一度は行かなければならなかったのである。

ところで「スピリチュアル・ツーリズム」とは何か、という疑問を持たれた読者諸氏もいると思う。いや、全員が初耳だと思う。なぜなら、わが輩の造語だからである。

ある会合で「ツーリズム」がテーマとして持ち上がった。ツーリズムとは、観光旅行、観光事業のことである。その場にいた大学の先生は「ダーク・ツーリズム」をテーマとした。

ダーク・ツーリズムを直訳すると「暗い観光」である。戦争、虐殺、被災など負の記憶が刻まれた場所を訪ねる旅のことである。アウシュビッツを訪れたある女性は感受性が高く足がすくんで入れなかったという話を聞いていた。

そこでわが輩は単純に考えた。その対極のものはないか、と。わが輩の口からポンと飛び出したのが、「スピリチュアル・ツーリズム」である。

(お調子者のわが口が勝手に発信しただけだよ！)

時すでに遅し。わが輩のテーマとなってしまった。後悔はいつもあとから追いかけてくる。

ならば、スピリチュアル・ツーリズムとは何か、を構築してやろうではないか。

そもそも「スピリチュアル」の語義は何か、というとスピリット（精神、霊、心）の形容詞である。辞書には、崇高な、神聖な、宗教的な、という意味もある。

先日ある宗教学者と話した時、「スピリチュアリティ」と言わないで「霊性」でいいんだよ、と語っていた。そうすると「霊性ツーリズム」「霊性観光」になり、何だか怪しい観光になってしまう。やはり、ここは「スピリチュアル・ツーリズム」でいきたいものである。

鈴木大拙がスピリチュアリティを「霊性」と訳したのが一般的になった。彼は戦中の大和魂「日本精神」という表現に反発して「霊性」という訳語を用いた。大拙の言う「霊性」は、体験によって修得される人間の本性のことである。わが輩のことばで言うと、あるがまま、自然にまかせて生きることである。もちろん手前勝手に生きることではない。

重い。この解釈では重すぎる。楽しくない。没我的体験だけに陥る可能性がある。そうならないための仕組みを考える必要がある。そもそも「ツーリズム」には、歓びと笑いと涙があって、知識がなければならぬと考える。知識には「ダーク・ツーリズム」の要素も必要だと考える。

以上を要約すると、体験+歓びと笑いと涙+知識が、わが輩のスピリチュアル・ツーリズムということになる。

この看板を掲げて、シドニーに向かった。わずか三泊、機中二泊の旅である。

オーストラリアには、古き友人インド商人の子どもたちがブリスベンにいる。長男はまだ高校留学生、次女は絵描きである。久しく会っていないので会ってみたいが、この日程では無理。キャンベラにもインド学研究者がいるが、これも無理である。

長らく交信していなかったメール・アドレスに送信してみた。アドレスは生きていた。シドニー在の友人Iさんからである。「是非シドニーにお越しく下さい」とある。

読者諸氏よ。もつべきものは友人である。わが輩が連絡をとったのは、彼もそうだが、すべて“印友”である。オーストラリアに行っても、インド大魔王が“インド”から離れることはない。

オーストラリアで何を見たか。わがスピリチュアル・ツーリズムは構築できるのか。次号で開陳しようではないか。